

## 別添 3

# 厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業） 総合研究報告書

## HIV 陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に資する研究

課題管理番号：H30-エイズ一般-30150701

研究代表者 山田 富秋（松山大学人文学部 教授）

### 研究要旨

治療の進歩で予後が大きく改善し慢性疾患と位置づけられるまでになった HIV 感染症であるが、治癒はないため、HIV 感染という状況に変わりはなく、HIV 陽性者は生きづらさや精神心理的困難を抱えていることが少なくない。ここに、精神的・心理的支援に関わる課題が指摘される。本研究は、平成 29 年度まで「HIV 感染症および合併症の課題を克服する研究」班の研究分担として実施してきたが、研究課題の重要性と専門性が高いため、平成 30 年度より独立した研究班と位置づけられた。本研究は、先行研究の成果を踏まえ、HIV 陽性者の精神・心理的実態を明らかにし、より効果的な精神・心理的支援策を開発し、心理的支援を統合した診療ネットワークモデルの提供を試みた。また、平成 31-令和元年度より、研究代表者を白阪琢磨（国立病院機構大阪医療センター）から山田富秋（松山大学）に変更した。本研究は、研究 1（大山泰宏）「HIV 陽性者へのカウンセリング効果の検証」、研究 2（安尾利彦）「HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討」、研究 3（村井俊哉）「MRI 画像による HIV 神経認知障害の神経基盤の解明」、研究 4（池田学）「HIV 陽性者の精神疾患医療体制と連携体制の構築」、研究 5（山田富秋）「薬害被害者の心理的支援方法の検討」の 5 つの分担研究を実施した。

### 研究分担者

大山 泰宏（放送大学 教授）

安尾 利彦（独立行政法人国立病院機構大阪医療センター 主任心理療法士）

村井 俊哉（京都大学大学院医学研究科 教授）

池田 学（大阪大学大学院医学系研究科 教授）

### A. 研究目的

厚生労働行政の課題の一つでもある HIV 陽性者に対する精神・心理的支援方策を多角的に探求し、HIV 医療と精神医療の連携体制を構築することが本研究の目的である。

本研究開発課題を構成する研究 1 から研究 5 までの研究目的について以下に説明する。

#### 研究 1(大山) 「HIV 陽性者へのカウンセリング効果の検証」

HIV 陽性者に対する心理カウンセリング、とりわけパーソナリティ変容に作用する力動的心理療法の効果を実証的に検証し、心理的支援法に関する具体的提言をおこなう。

#### 研究 2(安尾) 「HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討」

HIV 陽性者の行動面の障害を伴う心理学的問題、特に

受診中断に関して、その発生状況、受診中断と関連する要因、受診中断に至る心理力動を明らかにし、それに基づいて受診中断予防、受診再開、受診継続のための適切な心理学的介入方法を明らかにする。

#### 研究 3(村井) 「MRI 画像による HIV 神経認知障害の神経基盤の解明」

HIV 関連神経認知障害(HAND)診断基準領域に加え、表情認知、意思決定等の障害が報告されているが、その神経基盤の知見は乏しい。今年度はMRI画像と最新の画像解析技術で、これらの障害の実態を明らかにし、陽性者の心理的支援の基礎情報を提示する。

#### 研究 4(池田) 「HIV 陽性者の精神疾患医療体制と連携体制の構築」

大阪府内の HIV 陽性者の精神疾患合併症の実態および診療の課題を明らかにし、HIV 陽性者に対する精神科医療機関の連携体制を構築するための基礎資料を提供する。

#### 研究 5(山田) 「薬害被害者の心理的支援方法の検討」

薬害被害者の抱える HIV 感染というスティグマがどのような「生きづらさ」生み出しているのか、インタビューから得られたライフストーリーを歴史的文脈に位置づけることによって質的に読み解き、そこから被害者にとって効果的な心理的支援方法を考察する。今

年度は薬害被害者の「生きづらさ」を構成する HIV 感染に由来するスティグマの心理社会的意味を明らかにすることによって、効果的な心理的支援方法を考察する。

## B. 研究方法

### 研究1(大山)

平成30年度～令和2年度にかけて、エイズ治療拠点病院である京都市立病院と連携し、HIV陽性者に合計で25回のカウンセリングをおこない、事前・事後、および中間において、心理学的アセスメントをおこなう。

### 研究2(安尾)

A)平成30年度、大阪医療センターのHIV陽性者168名を対象に、診療録から後方視的に基本属性、受診中断歴、受診無断キャンセル数等を抽出する。B)令和元年度、同施設のHIV陽性者を対象に、受診中断等行動面の障害を伴う問題の有無の調査、心理尺度を用いた量的調査を実施し、糖尿病と高血圧症の慢性疾患の患者各200名に同様の調査を実施し、比較を行う。C)令和2年度、2012年～2014年の2年間に同施設を初診受診したHIV陽性者のうち、6ヵ月以上にわたる受診中断経験を有する「中断・再開経験者」群とし、中断経験のない「受診継続者」群と比較する。

### 研究3(村井)

平成30年度は、神経認知障害と灰白質体積減少の関連性を探求し、令和元年度には、nadir CD4と白質神経線維障害・神経認知障害との関連性を、令和2年度においては、診断基準規定外領域への神経認知障害の広がりについて研究する。

すなわち、大阪医療センターで取得済みの患者群・対照群各40名、合計約80名のデータを用い、神経認知課題の患者群と対照群の比較、患者群の課題成績と脳灰白質体積の相関等についての画像統計解析を行う。疾患群における認知障害を神経心理検査バッテリーで評価し、個々の認知ドメインの検査成績とMRI画像から得られた灰白質・白質の形態学的指標との関連を解析することで、障害の実態を明らかにし、心理的支援につなげる知見を提示する。

### 研究4(池田)

平成30年度は、大阪府の精神科医療機関でHIV陽性者を診療している機関に対して、直近半年間のHIV関連精神疾患の診療実績、診療上の留意点、紹介元、紹介先などについて質問紙調査を実施する。令和元年度は、精神科医を対象としたアンケートをもとに精神科医療関係者を対象にHIVに関する知識の習得を目的とした研修プログラムを作成する。令和2年度は、HIV陽

性者を対象としたWeb調査を実施し、精神科への診療希望ならびに受診のしづらさについて実態を明らかにする。

### 研究5(山田)

A)平成30年度は、ある拠点病院のHIVチーム医療における心理カウンセリングの役割についてインタビュー調査を実施した。B)平成30年度～令和2年度は、薬害被害者のライフストーリーを歴史的文脈に位置づけることを通して、薬害被害者の「生きづらさ」について質的に分析する。C)令和2年度は、薬害被害者を対象とした新たなインタビューを実施する。また、HIV感染がスティグマとして働くことによって、薬害被害者の孤立を招いた事態がピアの支援によって緩和される事例をライフストーリーの分析を通して提示する。

### (倫理面への配慮)

研究開発代表者は松山大学における人を対象とする研究の倫理審査に関する委員会の審査を受け、研究遂行の認可を受けた。各研究分担者は所属先及び研究対象の機関において倫理審査を受け承認済みである。

## C. 研究結果

### 研究1(大山)

平成30年度まで6例の参加者が得られ、うち5例に関してカウンセリングが開始された。これまでの終了事例と合わせて9事例を実施済みである。しかし2例がいずれも4回目あたりで中断した。中断の原因として、セラピストと親密な関係を築きあげる過程で、対人関係における防衛パターンが無効になった時に、新しい関係性に対して肯定的な受け止めではなく、解体不安が生じたことが推測される。開始時の4回目あたりがその後の展開と支援をアセスメントする鍵となることがわかった。実施済みの事例については、DAMS抑うつ不安尺度、自尊感情尺度、首尾一貫尺度、対象関係尺度等の心理アセスメントを実施した結果、いずれも抑うつや不安気分の著しい改善が見られ、カウンセリング効果が実証された。

### 研究2(安尾)

A)診療録の後方視的調査結果として、30歳以下で、抗HIV薬の無服用、無断キャンセル回数の多さと、受診中断の間に関連が認められた。B)高血圧症と糖尿病の慢性疾患との比較の結果として、自尊感情が低い人ほど治療薬の中断があった。HIV陽性者に比べて高血圧症の人や糖尿病の人は自己中心的な他者操作と一体性の過剰希求が高かった。治療継続や就労が困難な慢性疾患患者に対しては、自尊感情に焦点を当てた介入が

求められる。また HIV 陽性者は他の慢性疾患に比べ、他者に対する健全な共感性や自己と他者の境界感覚を有しているが、過度にこの傾向が強い場合には、他者に対して劣等感や心理的な距離感を抱きやすい可能性がある。C) 受診中断・再開経験者の比較によって、受診中断者は自分に攻撃を向けやすい傾向があり、継続受診には自罰傾向の緩和および問題解決に向けた方法の提示などの援助が重要であることが明らかとなった。

#### 研究3(村井)

患者の免疫力を反映する CD4 数のうち、低い nadir CD4 患者群では、運動機能、遂行機能、感覚統合などの認知機能が有意に低下していた。nadir CD4 が低い群ほど、障害を生じやすいことが半明した。また、nadir CD4 が低い HIV 陽性患者では、認知機能障害と脳白質神経線維の障害の一部に関連性があることが示された。報酬を伴う意思決定課題 (Cambridge gambling task [CGT])、意思決定に先立つ情報収集課題 (Information sampling task [IST]) で患者群に障害がみられた。課題と灰白質体積との相関領域について、IST で患者群の前帯状皮質に有意な相関がみられた。

#### 研究4(池田)

精神科受診中の HIV 陽性者の診療内容は、うつ病が半数を占めており、通常精神科診療と同様に行えることから連携体制構築の可能性が示唆される。また、研修会への参加経験は 11.8% と低いにもかかわらず、参加希望は 88.9% と高かった。研修ニーズは抗 HIV 薬との薬物相互作用、HAND、針刺し事故という内容での希望が高かった。HIV 陽性者を対象とした Web 調査で回答が得られた HIV 陽性者 28 名のうち、50% に精神症状があり、21% が精神科通院中であった。精神科への抵抗感 64.3% がもっていた。精神科病院の選定基準で大切な要件として、LGBT に対する配慮 (75.0%) や HIV への理解 (71.4%) を HIV 陽性者が求めている。

#### 研究5(山田)

薬害被害者の医師に対する信頼感に着目し、1980 年代のエイズパニック前後における医師への態度の変化を比較した。また、薬害エイズ裁判前後の歴史的状況に着目し、裁判に直接関わった世代 (1960 年代生まれ) と、その後の世代 (1970 年代半ば以降生まれ) とを比較することによって、両方の世代の「生きづらさ」と「生きなおし」の質的相違を明らかにした。さらに、ART の普及後においても、HIV 感染はスティグマとして薬害被害者に何らかの「生きづらさ」をもたらす源泉となっていることを、ライフストーリーから明

らかにした。薬害被害者は HIV 感染した自分をネガティブなものとして捉え、孤立する傾向があった。しかし、同じ感染者 (ピア) との接触をきっかけに好転した例も見出された。

## D. 考察

### 研究1(大山)

中断事例に関しては「4 回目の危機」を乗り越えることの困難さが分析された。この危機を乗り越えて、新たな関係性の中に、すなわち、それまでの自分の意識的な在り方とは異なった自己の生成の動きにシフトできると、カウンセリングは継続していく。HIV 陽性者への心理的支援の方法論を構築するうえで、今後、HIV 陽性であるといった秘密を抱えながらも一体感を希求する対象関係の在り方をさらに検討していく必要がある。

### 研究2(安尾)

慢性疾患患者には、自尊感情の高さと治療継続や就労といった行動との間の関連性、対人緊張の高さや対人的交流の乏しさが、強弱に差はあるが共通して認められた。また高血圧症患者、糖尿病患者は、HIV 陽性者よりも就労している傾向にあった。これらの点から、慢性疾患患者に対する心理的支援に関しては、罹患等による自尊感情の低下や対人緊張・回避に焦点づけた介入が重要であると考えられる。また、HIV 陽性者の就労困難については、他の 2 疾患よりも疾患や性的指向に対する社会的偏見が影響している可能性が推察される。

また、HIV 陽性者は他の 2 疾患よりも「自己中心的な他者操作」と「一体性の過剰希求」が低く、一般人口よりも「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」が低いことが明らかとなった。「自己中心的な他者操作」は他者の操作的利用や共感性未発達を、「一体性の過剰希求」は他者を独立した他者と認めない傾向を、そして「見捨てられ不安」は拒絶の恐れや相手の反応への過敏さを意味する。これらの点から、HIV 陽性者は、他の 2 疾患患者よりも他者に対する健全な共感性や自己と他者の境界感覚を強く有する一方で、他者に対して劣等感を抱き、心理的に距離を置く傾向がある可能性が推察される。

心理療法においては、個々の HIV 陽性者の対象関係についてこれらの点に留意したアセスメントと介入が必要である。

### 研究3(村井)

HIV 感染でみられる神経認知障害は不均質で個人差があり、その不均質性や個人差の背景には灰白質体積減

少という生物学的背景、神経基盤があることが示唆された。

低いnadir CD4 患者群では、情報処理速度、運動機能の認知機能が有意に低下していた。また、低いnadir CD4 患者群では、脳全体で、脳白質線維のMD値の上昇が認められた。感染初期の免疫低下が著しいほど白質の神経線維損傷が生じやすいと示唆され、その損傷は神経認知障害の一部に影響しており、神経認知障害の生物学的背景、神経基盤であることが示唆された。

HIV 患者群では情報が十分に収集される前の段階で、意思決定が衝動的に行われていること、その神経基盤が前帯状皮質であることが示唆された。

#### 研究4(池田)

大阪府の精神科医療機関でHIV陽性者を診療している精神科医療機関に対して、質問紙調査を実施した結果、精神科受診中のHIV陽性者の診療はうつ病が半数を占めていた。また、研修ニーズは薬物相互作用、HAND、針刺し事故において高かった。

精神科の病院選定基準で大切な要件としては、LGBTへの配慮やプライバシーが守られて安心して話ができる環境の整備が特に求められている。他にもHIVに対する理解があることが求められており、HIV研修の受講がHIV陽性者の受診しやすさへつなげられる可能性が考えられる。回答者により精神科の病院選定で大切とする要件は異なり、さまざまなニーズに応えられる多様な精神科医療機関の選択肢が存在することが重要である。

#### 研究5(山田)

3年間にわたる当事者のライフストーリーの分析から明らかになったのは、過去の薬害エイズ事件から由来するHIV感染にまつわるスティグマの存在である。薬害被害者は日常生活のさまざまな場面で、このスティグマから来る差別や偏見によって「生きづらさ」を抱えている。過去のトラウマ経験によって、強い不信任感や虚脱感を抱えている薬害被害者に対して支援を実際に提供したのは、制度化された医療者ではなく、過去に同じ経験を共有したピアとピアの組織であった。

## E. 結論

#### 研究1(大山)

HIV陽性者を対象として、25回の試行的なカウンセリングをおこなった結果、抑うつや不安気分の改善、自尊感情やストレス対処能力の向上が認められた。対象関係(他者との関係のパターン)の安定性に関しては、総体的には大きな変化は見られなかったが、その構造が変化していることは示唆された。カウンセリング

の効果を評価するための有効な指標の抽出という点からは、比較的短期のカウンセリングでは、気分の改善を見る指標が有効であった。また、HIVに対する意味づけの仕方が、他者と出会い関係を結んでいくカウンセリング過程への反応を示唆する指標となる可能性が示されたが、そこには対象関係の在り方が反映されるからだと考察された。

#### 研究2(安尾)

HIV陽性者を含む慢性疾患患者において、自尊感情の高さが治療継続や就労行動と関連することが明らかとなった。またHIV陽性者は他の2疾患患者よりも他者に対する健全な共感性や自己と他者の境界感覚を強く有する一方で、他者に対して劣等感を抱き、心理的に距離を置く傾向がある可能性があり、これらの点に留意したアセスメントと介入が必要であると推察された。

HIV陽性者の受診中断の発生状況が明らかとなったが、HIV陽性者が自分を攻撃することが、受診行動を阻害する現実的問題を解決して乗り越える力や、自分を大事にしようとする治療意欲を弱めている可能性が推察される。受診中断の予防や再開・継続の支援のためには、HIV感染等を巡るHIV陽性者の自罰的な感情への介入と、問題解決の指向性を補助・促進する介入が必要であることが推察される。

#### 研究3(村井)

HIV陽性者の精神・心理的支援においては、個人差に注目することが必要であり、その個人差は生物学的な神経基盤によって生じていることを意識することが必要である。また、初期の免疫機能低下の情報が支援にあたって、重要な情報であると考えられる。HIV陽性者は安全性や確実性の高い選択をできていない可能性があり、情報やリスクを十分に評価せずに行動してしまう可能性があることに配慮する必要がある。

#### 研究4(池田)

HIV陽性者に対する精神科診療は通常診療と同様に実施できる。HIV陽性者が精神科医療機関に必要な際の受診を可能とする医療機関の連携体制を構築するためには、HIV陽性者が抵抗感を低くできるような精神科医療機関向けの形態別の研修が必要と考える。

HIV研修内容のニーズは、精神科診療所では、「薬物相互作用」「HIV治療薬の副作用としての精神症状」など薬物治療に関すること、精神科単科病院では社会的支援・連携に関する「緊急入院の連絡先」「利用できる訪問看護や施設」「針刺し事故への対応」、総合病院では「HIV/AIDSに関する診療知識・薬物治療・社会的支援等包括的なニーズ」などであった。HIV陽性者はカミング

アウトする必要があるのかについても不安に思っており、より一層 LGBT の理解を求めていたことから、LGBT の理解にむけた啓発教育が必要である。

HIV 陽性者は精神症状があった時に HIV 治療の主治医に相談することから、HIV 治療を行う感染症科・内科医等が紹介しやすい HIV において理解のある精神科病院リストの作成が必要である。

#### 研究 5 (山田)

本研究の最大のメリットは、血友病の薬害被害者のピアによって構成された支援団体である NPO 法人「りょうちゃんず」の全面的な協力を得て、薬害被害者の視点を分析視角に入れるとともに、現在 HIV 医療に従事している看護師と臨床心理士を研究協力者として研究チームに組み入れることによって、当事者の「生きられた経験」だけでなく、医療現場における社会心理的支援の実際の文脈を考慮に入れることができたことである。

薬害被害者がスティグマに脅かされずに生活するためには、HIV/AIDS というスティグマに対する啓発活動と医療福祉機関の連携が必要である。HIV チーム医療の研究が明らかにしたように、実効性のある支援を行うためには、医療者自身が、薬害被害者の不安感を生み出している生活史的背景を理解し、可能な限りそれを受け止めていくことが重要である。それは、医療という限定的な文脈を超えて、薬害被害者の生活の文脈へと一歩足を踏み出すことを意味する。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

#### 研究代表者

山田富秋

血液製剤由来 HIV 感染者の心理的支援方法の検討—ある HIV チーム医療の実際から—：松山大学論集：第 30 巻第 4-1 号 213-241 頁 2018 年 10 月

#### 研究分担者

村井俊哉

原著論文による発表

欧文

- 1) Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. J Neurovirol. 2020 Aug;26(4):590-601. doi: 10.1007/s13365-020-00865-w. Epub 2020 Jun 22. PMID: 32572834.

2) 金井講治, 長瀬亜岐, 池田学

大阪府精神科医療機関における HIV 陽性者に対する診療の実態と研修ニーズ 日本エイズ学会誌 (投稿中)

## 2. 学会発表

### 研究代表者

山田富秋

1) 山田富秋, 橋本 謙

薬害被害者の心理的支援方法の検討 第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会 大阪府立国際会議場 2018 年 12 月

2) 早坂 典生, 山田 富秋, 橋本 謙, 種田 博之, 入江 恵子, 小川 良子, 宮本 哲雄

薬害被害者の心理的支援方法の検討—1970 年代後半生まれ血友病 HIV 感染者における「日常(普通)」生活の取戻し 第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会 熊本 (ポスター発表) 2019 年 11 月

3) 山田 富秋 (松山大学)、早坂 典生 (特定非営利活動法人りょうちゃんず)、橋本 謙 (岐阜県・愛知県スクールカウンセラー)、種田 博之 (産業医科大学)、入江 恵子 (北九州市立大学)、小川 良子 (看護師)、宮本 哲雄 (国立病院機構大阪医療センター)

薬害被害者の「感染」の心理社会的意味 2020 年 11 月 第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会オンライン大会

### 研究分担者

大山泰宏

1) 山本喜晴、田中史子、荒木浩子、市原有希子、大澤尚也、清水亜紀子、高橋紗也子、仲倉高広、野田実希、古野裕子、山崎基嗣、大山泰宏. HIV 陽性者に対するカウンセリング効果の実証的研究—薬物依存男性の事例を通して—、日本心理臨床学会第 38 回大会、2019 年、横浜。

2) 荒木浩子、高橋紗也子、田中史子、山本喜晴、市原有希子、大澤尚也、清水亜紀子、仲倉高広、野田実希、山崎基嗣、大山泰宏

HIV 陽性者に対する心理カウンセリングでの課題に関する研究. 心理臨床学会第 39 回大会、2020、オンライン開催。

### 安尾利彦

1) 安尾利彦

長期療養におけるコミュニケーションの重要性. HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師認定講習会、第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月

2) 水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨  
HIV 陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理的背景に関する研究。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月

#### 村井俊哉

1) Y. Yoshihara, T. Kato, D. Watanabe, T. Shirasaka, T. Murai. Differences of cognition and brain white matter between cART-treated HIV-infected patients with low and high CD4 nadir. Society for Neuroscience, Chicago, Illinois, October 19-23,

2019 (ポスター発表)

#### 池田 学

1) 金井講治, 長瀬亜岐, 池田学 : 大阪府内における精神科診療機関の HIV 陽性者の受診および受け入れ体制. 第 33 回日本エイズ学会学術集会・総会, 熊本, 2019 年 11 月.

2) 金井講治, 長瀬亜岐, 池田学  
大阪府の精神科医療機関における HIV 陽性者の外来診療の実態. 日本エイズ学会, 2020 年, 幕張 (Web 開催).

#### G. 知的所有権の出願・取得状況 (予定を含む)

なし